

# 南北海道考古学情報

南北海道考古学情報交換会会誌

No.14  
2008.2

編集  
南北海道考古学情報交換会編集委員会  
発行  
南北海道考古学情報交換会  
世話人代表・三浦孝一  
印刷 (有)三和印刷



釜谷4遺跡出土資料

第14号

## 【情報交換】

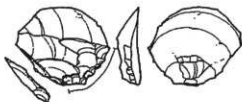
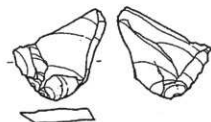
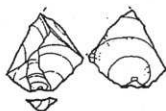
- ▶ 南北海道にはじめてヒトがきたのはいつか

## 【活動報告1】

- ▶ 第24回 南北海道考古学情報交換会概要

## 【活動報告2】

- ▶ 2003～2007年度  
南北海道考古学情報交換会の動向



桔梗2遺跡出土資料

## 【情報交換】

# 南北海道にはじめてヒトがきたのはいつか

本稿は、平成15年12月6日に開催された第24回南北海道考古学情報交換会今金大会の席上、第Ⅱ部情報交換2「南北海道にはじめてヒトがきたのはいつか」と題する公開討論の内容を採録したものである。会終了後、この内容について参加者及び各方面より記録として公刊すべきとの意見を数多くいただいたことから、この度第Ⅱ部の討論部に限り掲載することとした。

なお、進行については、標記のテーマについて2名から問題提起、それに対し3名からコメントという形式で下記の通り行われた（各氏の肩書きは当時のままとしてある）。

### ○問題提起1（50分）

提起1「渡島半島における前期旧石器の状況—白尻B遺跡下層・釜谷4遺跡を中心に—」

発表者：横山英介（私設北海道考古学研究所）

コメント

討議

### ○問題提起2（50分）

提起2「細石刃石器群とナイフ形石器群の年代的関係について」

発表者：寺崎康史（今金町教育委員会）

コメント

討議

### ○コメンテーター

千葉英一（北海道教育委員会）

竹花和晴（函館大学・函館短期大学）

宮本雅通（今金町教育委員会）

### ○司会

野村祐一（函館市教育委員会）

## 横山

本日の統一テーマであります「南北海道にはじめてヒトがきたのはいつか」につきまして、結論的に申し上げますと、私は渡島半島においても前期旧石器の段階からすでに人が住んでいた可能性が極めて強い、ということをまず申しておきたいと思えます。これは私の結論であります。

手順といたしましては、前期旧石器とは一体どういう時代を言っているのかということを簡単に。表1の編年表は芹沢長介先生が1969年『科学』39巻1号に書かれたものであります。私などは以来この編年表に基づいて、3万年を境にそれより古い旧石器群について前期旧石器、それより新しい旧石器群については後期旧石器という、この時代区分で論を進めてきたわけですが、本日の前期旧石器という用語もこの芹沢先生の1969年論文に基づいて話を進めたいということでもあります。従いまして、冒頭私が渡島半島においても前期旧石器からと申しましたのは、3万年よりも古

い段階に人がいた可能性があるということでございます。

本日は南茅部町（現函館市）の白尻B遺跡下層の資料、これはもう30年前に私などが調査した時に出土した資料。それと12、3年前に木古内町教育委員会が掘り出しました釜谷4遺跡の資料、この二つに焦点を絞り、さらに北海道におけるそのほかに関連する資料をいくつかスライドを中心にお見せしたいと思います。それではまず、白尻B遺跡の資料をスライドでお願いしたいと思います。

これは白尻の築港から写した写真でありまして、白く写っているのが白尻小学校です（図1）。遺跡はこの30数mという高さの段丘のついでに。縄文時代の遺跡の調査が終わりました後、深掘りをはじめました。幅およそ1mで深さ5m以上になりましたので、ちょっと写真は難しかったので地層の模式図、これを資料の方に示してあります。その25層というところから珪岩製の資料が出て参ります。これがいわゆる表側と呼

(B.P.)							
時代	C <sup>14</sup> 年代 (B.P.)	遺跡	土器型式群および 土器	土器	土器	土器	
2000	2700±170 N-53	須賀川	須賀川式群上	須賀川式群上	須賀川式群上	須賀川式群上	
	2600±180 N-51	須賀川	須賀川式群上	須賀川式群上	須賀川式群上	須賀川式群上	
	2500±130 N-186	須賀川	須賀川式群上	須賀川式群上	須賀川式群上	須賀川式群上	
	2400±120 N-84	須賀川	須賀川式群上	須賀川式群上	須賀川式群上	須賀川式群上	
	2300±90 Gak-567	須賀川	須賀川式群上	須賀川式群上	須賀川式群上	須賀川式群上	
	2200±110 N-52	須賀川	須賀川式群上	須賀川式群上	須賀川式群上	須賀川式群上	
	4180±180 N-504	大塚	大塚式群	大塚式群	大塚式群	大塚式群	
	4540±140 N-167	三河	三河式群	三河式群	三河式群	三河式群	
	4730±80 Gak-279	三河	三河式群	三河式群	三河式群	三河式群	
	5200±140 N-241	須賀川	須賀川式群上	須賀川式群上	須賀川式群上	須賀川式群上	
5200±140 N-288	須賀川	須賀川式群上	須賀川式群上	須賀川式群上	須賀川式群上		
5300±160 Gak-642	須賀川	須賀川式群上	須賀川式群上	須賀川式群上	須賀川式群上		
5000	4795±150 Ga-281	大塚	大塚式群	大塚式群	大塚式群	大塚式群	
	3800±200 I-400	須賀川	須賀川式群上	須賀川式群上	須賀川式群上	須賀川式群上	
	3400±300 M-227	須賀川	須賀川式群上	須賀川式群上	須賀川式群上	須賀川式群上	
	2740±170 N-174-2	須賀川	須賀川式群上	須賀川式群上	須賀川式群上	須賀川式群上	
	2580±200 N-214	須賀川	須賀川式群上	須賀川式群上	須賀川式群上	須賀川式群上	
	2240±200 M-770-771	須賀川	須賀川式群上	須賀川式群上	須賀川式群上	須賀川式群上	
	2450±400 M-780	須賀川	須賀川式群上	須賀川式群上	須賀川式群上	須賀川式群上	
	10005±500 I-943	須賀川	須賀川式群上	須賀川式群上	須賀川式群上	須賀川式群上	
	10000	12145±400 I-944	須賀川	須賀川式群上	須賀川式群上	須賀川式群上	須賀川式群上
		12440±300 Gak-949	須賀川	須賀川式群上	須賀川式群上	須賀川式群上	須賀川式群上
12700±500 Gak-950		須賀川	須賀川式群上	須賀川式群上	須賀川式群上	須賀川式群上	
13200±300 Gak-948		須賀川	須賀川式群上	須賀川式群上	須賀川式群上	須賀川式群上	
13600±600 Gak-951		須賀川	須賀川式群上	須賀川式群上	須賀川式群上	須賀川式群上	
14300±700 Gak-654		須賀川	須賀川式群上	須賀川式群上	須賀川式群上	須賀川式群上	
14800±500 Gak-210		須賀川	須賀川式群上	須賀川式群上	須賀川式群上	須賀川式群上	
15100±300 Gak-813		須賀川	須賀川式群上	須賀川式群上	須賀川式群上	須賀川式群上	
15400±400 Gak-149		須賀川	須賀川式群上	須賀川式群上	須賀川式群上	須賀川式群上	
15800±200 Gak-212		須賀川	須賀川式群上	須賀川式群上	須賀川式群上	須賀川式群上	
15000	15100±300 Gak-813	須賀川	須賀川式群上	須賀川式群上	須賀川式群上	須賀川式群上	
	15400±400 Gak-149	須賀川	須賀川式群上	須賀川式群上	須賀川式群上	須賀川式群上	
	15800±200 Gak-212	須賀川	須賀川式群上	須賀川式群上	須賀川式群上	須賀川式群上	
	17700±500 Gak-812	須賀川	須賀川式群上	須賀川式群上	須賀川式群上	須賀川式群上	
	>31900 Gak-952	須賀川	須賀川式群上	須賀川式群上	須賀川式群上	須賀川式群上	
	16000						

表1 芹沢長介氏による石器時代の編年 (芹沢1969)

んでありますが、全体の長さが9cm強で(図2)、これが刃部だろうと考えたものであります。これが側面(図3)。シャープな刃部が形成されると推定したものです。これがその裏面に当たります(図4)。厚手の剥片を素材にしていると考えた資料です。

この資料につきましては、30年以上前に掘り出して以来まったく進展しておりません。つまり理化学的な年代観、あるいは組み合わせの石器がどうなるか等、いろんな意味でまだ問題は30年前でストップしたままであります。従いまして現在私が申していることは、まだまだこれは決着が付いていないということであり、しかし、こういったタイプの資料は後期旧石器にはお目にかからないということ、しかも非常に深いところから出てきたという、こういうことで私は前期旧石器に属する可能性が極めて強いと考えたわけであり、ます。

次に示しますのは、木古内町教育委員会が調査した釜谷4遺跡です。これは海から海岸を見たところでは



図1 白尻B遺跡遠景



図2 白尻B遺跡出土クリーヴァー(正面)



図3 白尻B遺跡出土クリーヴァー(側面)



図4 白尻B遺跡出土クリーヴァー(裏面)

が、この辺の高さは白尻B遺跡と同じように30数mの共通した高さの段丘から出てまいります(図5)。当時掘っているところの写真がなかったものですから、近くの、この向う側が遺跡なのですが、国道から上がったところの崖面の写真でして(図6)、この草が、たくさん生えているあたりがローム層で、その下は風化し



図5 釜谷4遺跡遠景



図6 釜谷4遺跡付近の地層状況



図7 釜谷4遺跡出土ピック



図8 釜谷4遺跡出土ピック 裏面



図9 釜谷4遺跡出土チョッパー



図10 釜谷4遺跡出土チョッパー 裏面



図11 釜谷4遺跡出土チョッパー



図12 忠類村ナウマンソウ出土地点の資料

た泥岩の基盤層であります。こういうふうにはすぐ風化した泥岩の基盤が出るということです。そこからこういった石器が出てまいりました。これが表としました

ら(図7)、これが裏(図8)に相当します。大きさは今のはだいたい10cm弱、形がドリルもしくはピックのような形状を示しているということで、これは石器

かどうかという観点に関しましては、もう会場の皆さんにおいても異論はなかりょうかと思えます。これが石器でないということになりますと、もう一回石器の勉強を基礎からやり直していただきたいという資料でございます。これはおそらく共伴しただろうと、この出土状況はある一定の範囲内から7、8点まとまって出てきたということでしたので、その中にあるものの一つです。これは頁岩のチョッパーと私が名前を付けたものです(図9)。ここに細かい加工が入っております。これも石器ということで、まったく異論がない。これがもし自然石だということを主張する人がいるならば、もう一度石器の勉強を根本的にやり直してほしいという資料を提示しております。これはその一方の例です(図10)。私の当時の実測図では、これは自然面のような表現をしていますが、現在の見方からするともしかしたらこれもきちっとした剥離面の可能性も残しております。これも同じように、頁岩を素材としたチョッパーであります(図11)。ここに山形の刃部が形成される。

これらの資料につきましても当時のままの状態を私がしゃべっております。その後理化学的な年代が出たとか、もう一回掘り直して石器の組み合わせが分かったとかという話はまったくございません。なぜこれが前期旧石器なのかという、一つは後期旧石器にこういった石器が出てきていないということ、またこれからお話しします本州の事例では、釜谷4遺跡の2例目にあげましたチョッパーというのは星野遺跡というところに典型的に出土しているということ、私は古い石器の一群であると推定しております。

それでは、次に北海道に関連したものを二、三説明します。これは忠類村で昔、ナウマンゾウが発掘されました。そのナウマンゾウが発掘された近くからたくさん石を無作為に取り上げまして、その中から石器らしいと報告されたもの。これは北大の吉崎昌一先生がこういうものを人工の可能性のある破砕礫と報告しました(図12)。その後私がこの資料を見て、これは間違いな石器であると申しましたところ、その後佐倉の養成秀爾先生が駆けつけまして、奇麗な実測図を作って『北海道考古学』に発表していると思います。それを眺めていただきたいと思います。これは誰が見ても一端をきちっとポイント状に仕上げた石器であります。これは裏面と言いましようか、写真はあまりよくありませんが奇麗な剥片を素材にしています。なお、この年代観であります、ナウマンゾウは4万年前後より古いものということも地質学の人達が確定しております。従いましてこれが間違いない石器だということになると、4万年よりも古い石器である、つまり前期



図13 由仁町砂礫層回収のオオツノジカ化石角

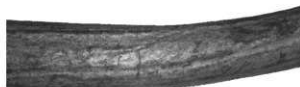


図14 同上化石角のキズ拡大

旧石器に属するということになります。この資料は確か現在、開拓記念館に保管されているということでもあります。

これはもう10年ぐらいになりますか、由仁町で出土したオオツノジカの角になります(図13)。これに実はこういったキズがついているのです(図14)。それで私はこれは明らかに石器によって切り込みを入れたものだろうと推定しました。この年代につきましては、北大の小野有五先生が、この砂礫層の炭を採取して名古屋大学の中村先生に測定していただいた。およそ6万年に近い年代が出ているかと思えます。従いまして、これが確実に人工品だということになりますと、このオオツノジカはもちろん、それに加工を加えた人間が存在したことになり、6万年に近い段階にすでに人が住んでいたという証拠と私は推定したものです。

これは早水台という九州の遺跡でして、日本の前期旧石器の象徴的な遺跡であります(図15)。やっぱり高さが30数mの段丘から出ています。また去年、今年とこの再調査が行なわれておりました。東北大学の芹沢長介先生が行なわれまして、今回たくさん石器が出てきた。もう一つの目的は年代を知ろうということで、火山灰の上なのか下なのか。ここでは阿蘇4という火山灰、これは9万年前後の火山灰だそう。その下に鬼海葛原という火山灰、これは10万年弱の火山灰で、この二つの火山灰がこの遺物包含層の上なのか下なのかを探ろうとしたらしいのですけれども、それがどうもうまくいかなかった。しかしいずれにしても、この辺にそういう古い火山灰が関与しているので、早水台の石器はもしかしたら10万年近いものになる可能



図15 大分県早水台遺跡遠景



図17 栃木県星野遺跡遠景

性が極めて強いという資料であります。これがその時出てきたハンドアックスというふうに使われた、非常にしっかりとした石器であります(図16)。これは実際に物を見ますと、もっと分かりやすい石器がたくさん出て参りますので、興味のある方は是非これを一回実物に当たられたらいいと思います。

これはもう一つ象徴的な前期旧石器、栃木県星野遺跡で、これは遺跡が扇状地の奥の方に形成されております(図17)。昔、私達がこれを地表からどんどん深く掘りまして(図18)、この年代観はレジメの表にありますので、後で興味のある方数字を眺めておいてください。ここに厚く堆積しているのが鹿沼軽石層と言いまして、およそ3万年前のものであります。従いまして、この厚く堆積した火山灰の下から石器が出てくるということになると、前期旧石器であるということになります。この下からいくつも標準的な火山灰が出ておまして、それを介して珪岩製の石器が出土しております。私は釜谷の中でチョッパーというふうに言いましたが、それはこの下からたくさん出てまいります。それで非常に面白いのは、これは最近の私のわずかな中から勉強した結果から申し上げますと、この星野で、この場所がバックホウでどんどん土を掃いたそうです。そうしますとこの鹿沼の下に包含層から珪岩製の石器と同時に安山岩だとか砂岩だとか、そういった岩種の違った石器がたくさん出てきている。もしかしたら釜谷のピックと私が言った岩種の違うものと頁岩のもの



図16 早水台遺跡出土資料



図18 星野遺跡地層断面

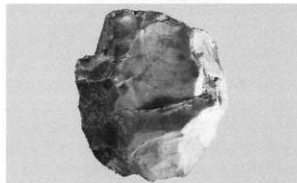


図19 星野遺跡出土石核

が同伴だとしたならば、こういう鹿沼の下の面構えによく似ているかなと思ひまして、その資料を見てきたいと思っています。これが星野遺跡の発掘の契機になった珪岩製のルバロアコアというふうに使われている日本前期旧石器の一つの特徴を持ったコアであります(図19)。周りを加工しながら、ここから一つのいい剥片を取っているということでもあります。

簡単にまとめますと、特に30万年前から変化のないのです、進歩がないのです。だけでも今ご覧になったように、いろいろな異論があると思いますが、私はこれは前期旧石器の産物であろうというふうにしつこく追求しているところであります。

#### 司 会

横山さん、ありがとうございます。ただいまの発言に対しましてコメントをいただきたいと思ひます。

まず今金町教育委員会の宮本さんから、白尻B遺跡の石器と釜谷4遺跡の石器を実見していただいて、また現地の遺跡を見て、それによるコメントをいただきます。

#### 宮 本

それではコメントさせていただきます。私自身、旧石器の勉強を始めてから10年にも満たず、私が生れる前から精力的に研究されている方に対してコメントを



図20 白尻B遺跡近景



図21 白尻B遺跡の周辺地形図（小笠原1985より）

差しはさむというのは非常に恐縮な思いもあるのですが、今の私の眼力でこれらの石器をどう評価するかといったことをお話ししたいと思います。

先程の発表とも一部重複しますが、まず遺跡の現況をスライドで確認したいと思います。

これは南茅部町白尻B遺跡の現況です(図20)。これは南から北を見たもので、林の奥が海岸段丘の傾斜面になります。当時の調査区はよくわからないのですが、白尻B遺跡の地形図を載せておきました(図21)。10m間隔のメッシュがかかっています、この地図で言いますと白尻B遺跡という文字のあるあたりがおそらく旧石器とされるものが出土場所に当たります。現在はこのようにカラマツの林になっております。

こちらは釜谷4遺跡の現況です(図22)。向うに見える橋の下が大釜谷川で、遺跡はその右岸に立地しているということになります(図23)。この遺跡の発掘はこの道路の建設に伴って行なわれたものでして、遺跡自体はこのように削られていて何も無いという状況です。



図22 釜谷4遺跡近景

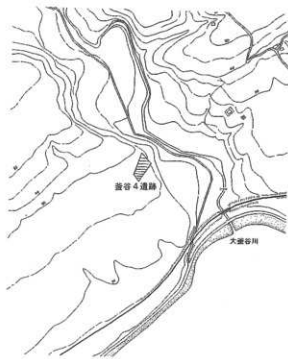


図23 釜谷4遺跡の周辺地形図（鈴木1991より）



図24 釜谷4遺跡付近にある露頭

これは遺跡の場所から約1 km離れた場所で見つけた露頭です(図24)。地表面下約30~40cmのところからローム層になっていて、その下が段丘礫層となっています。これはその中から見つけた礫ですけれども(図25)、これから問題となる石器とよく似た石材が、このように地層の中から顔を出しているという状況です。スライドは以上です。

臼尻B遺跡と釜谷4遺跡の石器とされているものを、その全体を見ての感想を述べますと、石器なのかどうか非常に疑わしいものが多いという感想を持ちました。石器かどうかということ判断する要件、石器であることの要件というものをまづきちつと整理する必要がありますだろうと思い、その整理したものを私なりに掲げました。それがレジメの「人為と自然の識別」の項で、石器は明確な意図の下に作られたものであって、二次加工の剥離面というのは規則的、連続的になっています。自然的な、例えば水流によって礫同士が衝突したり、凍結破砕といったようなものを伴う剥離面という



図25 露頭から産出する礫

のは意図が不明なもので、不規則、不連続となっています。それから偶発的に石器のような形をしたものができることがあります。それを偽石器と言います。人為的に剥離された明らかに意図的に剥離された剥片というのは表、裏、打面、これら三面から構成されていて、それぞれが明らかに判断できる。それに対して自然的に発生する偽石器は、裏、表、打面の判断が難しい、あるいはできないというものです。

それから、一つ一つの石器を観察することではなく、全体、石器と一緒に出てきた礫とか、そういうすべての資料を検討対象として石器というものを評価する必要があります。例えば一緒に出てきている礫、そういうものを比較するとか、含まれている地層がそもそも旧石器を含む地層なのかどうかということを含めて、総合的な観点から評価する姿勢が必要だと思います。

そこで、石器について一つ一つの観察所見を私なりに思ったことを表2に書いております。これらの資料

遺跡名	石器名	掲載図	観察所見
臼尻B	クリーヴァー	横山 1979	表面・裏面ともに自然破砕面。縁辺の微細な剥離痕は規則性・連続性に欠け、明確な人為的剥離面は認められない。
釜谷4	スクレイパー	報告書 第8図1	表面・裏面の様子から、これは凍結破砕等の自然的影響の所産とみられる。裏面縁辺に4枚の剥離痕が並ぶが、総合的な観点での評価が必要。
	チョッパー	報告書 第8図2	剥離痕の新鮮さが疑問。側縁の一部に大きく3回の剥離痕が並ぶが、全体として加工の意図が理解不能。
	チョッパー	報告書 第8図3	板状礫の一端に小さな剥離痕が連続する。剥離痕は全体として規則性に欠ける。回収された礫片にみられる衝突剥離痕によく類似する。
	ピック	報告書 第8図4 再実測	表面は自然面、裏面は大きく広い分割面である。表面が美しく剥離しやすい石材で、全面に軋々と剥落部がみられる。両側縁に裏面から挾状の二次加工が施されているように見えるが、これらはその表面の色調や風化度が剥落部のものと同じである。
	剥片	報告書 第8図5	表面は明らかに自然破砕面であり、この表面の状態をもとに表面全体も自然破砕面と評価できる。縁辺には他の礫片に類似した衝突剥離痕が並ぶ。
	剥片	報告書 第8図6	人為的な痕跡が認められない明らかな自然破砕面。
	石核	報告書 第8図7	片面が自然面、片面が自然破砕面により構成される礫片。剥離面とされる面は打点か不明瞭で剥離の意図が読み取りにくい。自然破砕礫の範囲に入る。

表2 観察所見



は後ろの展示コーナーにすべて展示してありますので、ご覧になっていただければと思います。

まず白尻B遺跡のクリーヴァーとされている石器ですが、表・裏とも人為的に剥離された面とは思えないですね。自然破砕面である。周辺にある微細な剥離痕というものが規則的ではなく連続的でもないという、明確な人為的な剥離面が一切認められないと思います。

それから、釜谷4遺跡のスクレイパーと言われているものですが、これも裏表の様子、これは凍結破砕とかそういった、凍結破砕というのは岩のヒビの中に水が入って、その水分が凍結する、凍結すると水の体積が1割増加し、その圧力で岩が砕けるという作用ですが、そういった作用で割れてしまったものの所産と思われる。釜谷4遺跡出土資料の実測図は資料に掲載されておらず、こちらと一緒に掲載させていただきます。チョッパーと言われているものですが、これは板状の礫の一端に小さな剥離痕が連続しているものです。その剥離痕というのが全体的に見ると規則的でない、一緒に回収されている礫、それらの縁辺に見られる状態と非常によく似ていることが指摘できると思います。また、剥片と言われているものですが、これも自然破砕面によって構成されているもので、人為的な痕跡が認められません。それから石核とされているものですが、片面は自然面でもう片面が自然破砕面であります。剥片を取った痕があるように見えますが、その剥離の意図が読み取りにくい。これも自然破砕礫の中に入るかと思えます。

釜谷4遺跡のピックとされている石器を再実測した図を載せてあります(図26)。このピックの存在によって横山さんは前期旧石器ではないかということを感じられたわけですが、今回観察するにあたり、表面にたくさんロームの付着がありました。特にとがった部分の両側にロームが付着していましたので、今回超音波洗浄器で洗浄いたしました。さらに細かい部分には、水をつけたブラシで軽く叩いてロームを取りました。若干残っているところがあり、まだ完全には洗浄できておりませんが、洗浄したことによってわかったことということがあります。それは、表面の剥落、表にも裏にも非常に多くの剥落面があります。これはその石材自体が非常に柔らかい、脆い石材であるということを示しています。その剥落した部分の風化の様子とピックの両側の加工の面とがほとんど同じ風化面なんです

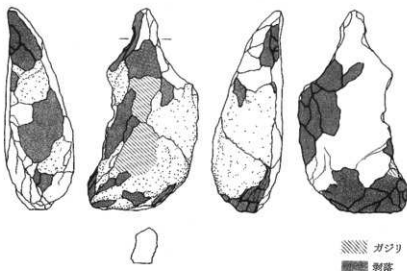


図26 釜谷4遺跡「ピック」の表面状態 (S-2/3)

ね。このことから、これは議論の余地があるかも知れませんが、こういったように非常に脆いという石材の特性から、この資料が人為的なものかどうか疑問が残るものと考えております。

次に、釜谷4遺跡は、これら7点の石器とされているもののほかに多数の礫が回収されております。それも展示コーナーにありますのでご覧になっていただければと思います。全体の礫の様子ですが、板状あるいは円盤状の中礫がほとんどです。円磨度は非常に低く、つまり水磨によってまろくなっていないものが多く、縁辺には礫と礫がぶつかってできる細かいつぶれ、そういったものが見られるものも非常に多いです。

そこで、横山さんが石器というものとそれら礫との比較を行なった結果、ピックとされているもの以外はすべて礫と考えられます。そう捉えるほうが自然であろうと思います。ピックにつきましても、このように非常に脆いという石材の特性があり、また礫の中から1点だけこういったものが出てきているという状況証拠から言わせて、石器であるかどうかはかなり疑問が残るのではないかと思います。

次に参考資料として、長万部町の花園3遺跡の旧石器ではないかと言われているものが近年発見されています。資料にその石器とされているものを掲載しています(北海道埋蔵文化財センター2000)。その中の一つは黒曜石製の剥片です。これが縄文時代の住居跡の壁面から発見されたことによって、ローム層の調査を始めたのです。その結果1番と2番の資料も出てきたということです。1番と2番の観察をしまして、両方とも先程私が提示しました人為と自然の識別の項を踏まえ、人為物ではないというふうにご覧いただけます。以上でコメントを終わります。

## 司 会

ありがとうございます。横山さん反論もあると思いますが、ちょっとお待ちいただいでよろしいでしょうか。次にコメントの二番目といたしまして、竹花さんよりいただきます。竹花さんにはヨーロッパそれからアフリカの前期旧石器ということに精通されておりますので、特に今回器種名であがってきていますピックですとか、クリーヴァー等といったもの、これに関する向うの方での前期旧石器での扱いと、今回のものの扱いということをお願いしたいと思います。

## 竹 花

「器種」といわれましたが、石器の類型(英: type)のことですね。ここではピック(仏: pic)といわれるもの、そしてクリーヴァー(英: cleaver)ですね。後者は「鈍状石器」(杉原 1974)とか、「鈍棒石器」というように表現されます。この2つの類型について述べます。

ただ、その前に、私の方から提案があります。旧石器文化、特に古い時代を対象(石器)に扱う場合は、学術上の世界的規範(英: global standard)を尊重していかないと、これはもう科学的で建設的な議論が成り立たないものであります。ある研究者(国内)の限定された学術環境で設定した編年観を、いつまでも踏襲し、援用することは、その問題(誤謬)を将来に先送りすることになります。やはり我々は、世界で使われている標準的な地史や時代区分を使わなければならないのであります。

そこで、横山氏が冒頭で援用された「芹沢時代区分・1969年」ですが、これは「3万年以前は前期旧石器時代である…」という編年観であります。もし、現在より3万年以前を「前期旧石器文化」として区切ってしまうと、芹沢氏の時代区分には所謂「クロマニヨン人」(羅: *Homo sapiens sapiens*)の段階の一部も、ネアンデルタール人(羅: *Homo sapiens neanderthalensis*)の全ての段階、そして原人(羅: *Homo erectus*)のあらゆる進化過程、更には最古のヒト属であるホモ・ハビリス(羅: *Homo habilis*)も含まれるのであります。人類学、先史学、そして地質学上におけるこれらの「人類の進化」の過程を一括りにして、既に別の定義がなされた世界的な学術用語である「前期旧石器時代」という呼称を用いることは、明らかに誤った暴論といわざるを得ません。この議論をこれ以上開陳しても際限がないので、おわります。

私に求められたコメントにお答えいたします。まず「ピック」の呼称であります。考古学上最初に使われたのはヨーロッパにおいて、フランス語で表現されたものであります。1886年に使われています (Mortillet

1886 <Sciences contemporaines>). この言葉の原義は羅語のピキウス(羅: *piccus*)であり、本来はキツツキ、転じてツルハシ(土掘り具)のことも含まれるようになりました。フランス語においても同じ語意であります。すなわちツルハシのような石器である、とご理解いただければよろしいかと思われま。ヨーロッパの考古学では16~18類型の石器が識別され、固有の名称が与えられております (Brézillon 1984 <La dénomination des objets de pierre taillée>). これらの殆どはヨーロッパの新石器文化に見出されます。如上で、最初の呼称と定義の対象となった「ピック」の類型も新石器文化のものであり、同時代の「穴掘り具」に使われたのであります。ヨーロッパ、あるいはユーラシア大陸において、「ピック」という石器の一般的な類型群が特定の時代を指し示す所謂「示準化石」(仏・英: index fossil)と成り得るのか、という質問に対しては明確に「否」と申しあげます。以上のごとく多様な類型があり、多くの文化や時代の範疇から見出されるのであります。

もう一つの類型「クリーヴァー」であります。これはわが国では明らかな誤解に基づいた認識があり、問題であります。所謂「クリーヴァー」はアフリカの前期旧石器文化を代表する石器の類型であります。1956年に、ティキシエ(Tixier J.)は所謂「クリーヴァー」(仏: *hacheaux*)の典型的な類型を5つに分類しました(Tixier 1956 <C.P.F.>). また、これら以外に分類し得ないものを「0類型」としました。後者を除く如上の5つの類型は、全てがアフリカのルヴァロワ技法と関連して製作されるものであります。ただ、ここで注意を要するのはアフリカの前期旧石器時代のアシユール文化のかなり古い年代の資料に伴うものと一緒に見られるのであります。一方、「0類型」のクリーヴァーは原類型(仏: prototype)とか、非典型的なものと同位置づけられ、アフリカ以外の至る所で発見されております。ヨーロッパやインド等で知られているものは全て「0類型」であります。もし、日本で所謂「クリーヴァー」に相当する資料が出土し、「示準化石」としてそれ相当の地史や石器文化の所産として議論するのであれば、このティキシエ氏の研究を踏まえて議論しなければならぬのであります。

実際に、横山氏が発見した白尻B遺跡下層の所謂「クリーヴァー」を拝見しますと、これは素材からして剥片剥離作業から得られたものですらないのであります。岩石の節理面が破碎して出来た1個の、我々は「デブリ」(仏・英: debris)と呼んでおりますが、単なる岩屑であります。それがフラッシング(英: flashing)、岩と岩が衝突して、不連続な「調整剥離」のような状

態が現出しているに過ぎないのであります。形(輪郭)は、たまたま所謂「クリーヴァー」であります、その製作過程の特徴が全く見られません。

それから出土層の特徴を観察しても、現在までの知見では南茅部町あるいは鹿部町においては、どんなに掘り下げても年代を知りうる洞窟の火山灰等は出てこないわけであり(瀬沢 et al. 1992『地質学雑誌』)。9万年とか10万年前の堆積物にすら到らないのであります。また、白灰B遺跡の場合は比較的新しい起源の海岸段丘であります。横山氏自身も執筆された『南茅部町史』(南茅部町 1979)の中で、瀬川氏(地質学)がいつておられますけれども、海岸段丘で40m、50m位のは、リス・ヴルム間氷期における海面上昇期の11万5千年から13万年位前の温暖期に形成された波浸台であったわけであり。これは下末吉海進期と呼ばれる全局的に確認されているものであります。何を申し上げたいかといいますと、遺跡の地形は如上の時期に形成され、最終氷期に干上がって陸化したものであります。白灰B遺跡や釜谷4遺跡もそうでありませうけれども、最大限古く見積りましても、陸地化の起源は11万年位前までしかさかのぼれないのであります。従いまして、如上の時期(間氷期)よりは古い地形であり得ないのであります。前期旧石器文化というのは、この時期より更に古い時代なわけでありませうから、この資料の出所には到底学術的な整合性が無いのでして、真面目な議論にはならないのであります。

「ピック」のことでもう一言、短い限られた時間内の説明不足で申し訳ないのですけれども。横山氏は「仙台市山田上ノ台遺跡の資料と比較し得るのではないか…」と仰って、「山田上ノ台遺跡はだいたい11万5千年から12万年位だろうと、段丘地形から…」と述べておられます。ただ、その山田上ノ台遺跡は、今般の日本考古学協会・旧石器製造問題調査特別委員会の検証作業で、報告された石器の内47%が偽石器であると指摘されております(日本考古学協会 2003: pp.106-119)。また、横山氏の援用(横山2001, 2003『新しい視点・分野の考古学』等)において、図で示された同遺跡の資料の9割が、前述の同協会・同委員会の報告で偽石器であり、学術上の価値がないことが発表されております(日本考古学協会 2003: pp.106-119)。横山氏が先年示した比較は(横山 2001)、今日の「石器形態学上の比較対象になりえる」(横山 2003)、というのは全く学術上の根拠を喪失してしまっておるのであります。

結論を申し上げさせていただきますと、全くヨーロッパであるとか、アフリカであるとか、そういうところの知識は応用でき得ないのであります。実年代の相

違を考へても到底そのような古いものが、この地に運動して存在し得た可能性はないのであります。いろいろまだあるのですが、このへんで終わります。

## 司 会

ありがとうございます。もう一つコメント3といたしまして、千葉さんの方から、特に北海道の旧石器編年の中で見た今回の石器についてコメントお願いいたします。

## 千 葉

非常に難しいコメントを求められましたけれども、今、お二人のコメントは否定的ということで、横山さんの冒頭の結論では可能性が高いということで、可能性の有無については私としてはコメントできません。最近そういう仕事は全然しておりませんので。

ただ北海道では、研究史的には、一番最初はやはりマンローだったと思います。鋼路のは自然石だろうといわれていますけれども、城山のチャンあたりどころで見つけた石器が前期旧石器ではないかと言ったのがはじまりだったのではないかと思います。

一つだけ、竹花さんコメントについてですけれども、ここで横山さんがおっしゃっている前期旧石器というのは、あくまでも3万年以前ということですので、ヨーロッパ、アフリカの前期旧石器とはまたちょっと違うということ。向うで言う前期・中期を含めて、とにかく3万年、ナイフ形石器以前を考慮しての前期旧石器でございますので、その辺の比較については誤解のないようにと思います。コメントらしいコメントにならなくて誠にすみません。

## 司 会

ありがとうございます。ただいま三つのコメントがございました。横山さんの方から。

## 横 山

大変貴重なコメントをいただきまして、本当に勉強になると思います。私もざっくばらんに言えば、とにかく勉強するための素材がたくさんあった方がいいだろうということなんですが、これはまた冒頭に言いましたように、とにかく白灰の資料の場合はおよそ30年前、それから全然進歩していないということを前提しております。ただ今、竹花さんから前期旧石器という言葉、これはまた昔からそういうふうに使われているのですが、日本の前期旧石器というものがまず設定されまして、その前期旧石器がさらに細分されて行くんだという手順をとりたいということ、こういう

た時代設定をしたと。ところがご承知のようにいわゆる捏造の語が出てまいって、一変にその辺の手續きがふっ飛んでしまった。従って私達は、また元に戻って当初からやり直すということ、こういった芹沢先生の古い時代区分に立ち戻っているということでありませぬ。

それから、宮本さんから指摘された石器かどうかということですが、これは私が特に珪岩の石器を扱ってきた中では、もうまったく問題ない石器であるということ。特にチョッパー、これは星野のシリーズにたくさん出て参ります。一度宮本さんにも星野遺跡の資料を実現していただけること、こういうふうにお思っております。

ピックにつきましては、名前にこだわっておりませぬ。もしかしらこれは先端が磨耗していたら、これは機能論から言えばドリルかも知れないとか、いろんなことを最近考えるようになっております。従いまして竹花さんが言われたように厳密な意味での世界の地域を代表する、そういった意味で私はピックというふうな名称をつけた訳ではない。それで混乱が多少あるならば、新たにこの名称を考え直してもいいじゃないかというふうにお思っています。

いずれにいたしましても、わずかながら、かすかにナイフ形石器よりも古そうな資料が出てきているということで、まだまだこういう問題を追究していこうと考えています。以上です。

## 司 会

ありがとうございます。問題提起1に関しましては一応ここで切りたいと思いますが、ここで会場の方から今までの発言に関しまして、何か質問がありましたらお願いいたします。(なし)

そうしましたら、寺嶋さんは今回の発表どうでしょうか？

## 寺 嶋

今回のテーマを設け、横山さんに提言をしていた理由というのは、やはり捏造問題を踏まえて、私どもが芹沢先生を始め、日本には前期旧石器があると言っていた方々の資料をもう一度見直すことから始まるのではないかとということの一つ考えまして、今日このような提言を一番目として設けたわけですが、私が問題にしたいのは、その当時の時代の背景もありますが、第三者が客観的に判断できる出土状況を記録することですね。それがやはり一番大事ではないかと、考古学をもっと科学的にしなければならぬということが捏造問題で言われましたので、やはり発掘

の状況を第三者がわかる形で提示しなければ、これはいくら石器であるか石器でないかという議論しても不毛な議論に終わってしまう可能性があります。今後、そういう遺跡を見つけて、しっかりと発掘調査をする。断面とかの抜き取りではなくて、発掘調査をするということの一つ手順として行なわない限り前期旧石器があったかどうかという問題には決着はつかないだろうというふうを考えています。ですから石器を見て石器であるとか石器でないかということは、やはりその出土状況によるだろうということです。

それで、参考資料の長万部の花岡3遺跡ではそれが記録されています。私はこの中では石器とされ、図示されたもの他は何なのかということが大事ではないかと思えます。なぜこの3点を抽出したのか、この手順がこの報告ではまったく抜けております。私はもし、これが石器であるとするならば、他の種と言われているものも検討しなければならぬだろうと考えています。

## 司 会

ありがとうございます。コメントの方、もしくは提言者の方、もう一言二言何かありましたら、竹花さんお願いします。

## 竹 花

釜谷4遺跡に関連しまして、私は、今から3年前位に、渡島半島南端部の津軽海峡に面する、函館市汐泊川流域から木古内町亀川流域に至るまでの約300kmの地域を巡検したことがありました(竹花2002「南北朝道・函館湾における石器・石材の供給システム」)。

目的は、石器の石材、要するに縄文時代の石器石材の産出地をつきとめることであります。その中で、2つの有力な河川水系が、あるいは鉱脈の露頭の存在が確かめられたのであります。1つは久根別川水系タラ沢川(函館市・七飯町)、函館の水源・中野ダムの近隣にあたります。もう1つは、この釜谷4遺跡の大釜谷川であります。特に大釜谷川は非常に良質の硬質頁岩、あるいは珩素分を多く含むメノウみたいな石も見つかっております。是非、証拠をお見せしようと思ひまして、この頁岩の大きなブロックを、今朝こちらへ出向く前に、釜谷4遺跡のやや上流の露頭で拾ってきました。横山氏の「ピック」の石材は粗粒の流紋岩であります。良質の硬質頁岩はこの様にふんだんに採取可能であります。ここで、何を申しあげたいかといいますと、最近のフランスでは、石器石材の獲得環境の研究に大きな注目があつております。前期旧石器時代から既に、石器石材の複雑な流通が予想以上

に広域に展開されていることが報告されております (Geneste 1985)。ところで、釜谷4遺跡は、正に硬質頁岩の岩層 (戸田川層・木古内層) の上に堆積した更新世終末の堆積物の上に形成されているのであります。最短距離の露頭までは、何km、何百kmではなく、20m、30mの最寄りにあるのです。場合によっては、遺跡自体の産地性堆積物の中に見いだされるのであります。ところが、所謂「釜谷4の前期旧石器」には全くこれら良質の硬質頁岩が使われていないのであります。如上の巡検で確認したように、この地域を代表する絶好の石材産出地にもかかわらず、それが全然使われていないのであります。では、どういう石材が報告された所謂「前期旧石器」(木古内町1991「釜谷4遺跡」)であったかと申しますと、海岸段丘の奥の高所から産地性の土石流に混入したとおもわれるものだけであります。やはりこれらのことから、申しますと、非常に前期旧石器文化の存在する根拠が乏しく、「釜谷4の前期旧石器」は学術上の価値が殆どないということであります。

## 横山

最初から言ってますように、釜谷の資料はとにかく縄文を掘ってたまたま7点ピックアップされたというだけの話です。これは聖って意識的に古い石器を調査したものではないという、非常に限定された中の資料である。従って、その辺のことも考慮に入れて考えなくてはならないだろうと、再度調査しようとしても、もうあそこは全然ないですからね。

## 司会

ありがとうございます。なかなか難しい問題です。ただ先程寺崎さんの言われた、どういうふうにと石器が出たか、またどういう状態であるかということ、特に今日取り上げました二つの遺跡の石器に関しましては、会場の後ろの展示コーナーで展示しております。このまま幕を引くのは、ちょっと心残りといえますが、このあと夜もございまして、石器を見た感想をいろいろ皆さんで議論してって、古い石器が南北海道にもしあるとすれば、それが初めて人が来たのがその時代になるということになるわけですから、とにかく石器を見る見方、それ自体が私達に求められているわけですから、まず石器を見ることから始めていくことでこの問題が進んでいくのかと思います。

ということで問題提起「に関して、一度ここで終わらせていただきます。どうもありがとうございます。

問題提起の2は「細石刃石器群とナイフ形石器群の

年代的関係について」ということで、寺崎さんから問題提起をしていただきます。お願いします。

## 寺崎

第1の問題が長引いて私の喋る時間がなくなることをご期待していたのですが、会場からあまり意見が出なかったものですから、私の喋る場ができてしまっているんですが、このテーマにしたことを今では非常に後悔してまして、何か結論的なことを言わなくてはならないというテーマだからです。

現在、北海道で後期旧石器時代、私は前期・中期旧石器時代というのは、可能性としてはあるものの、現状では北海道においては、今のところないであろうというふうにご考えております。その理由は、これを喋るとまた長くなりますが、先程のきんちとした発掘事例でもって、すべてを提示した上で石器かどうか、出土状態ですね、それを確認することがやはり一番大事なことでないかと考えていますので、前期・中期旧石器時代は、可能性としてはあるものの、今のところないだろうというふうにご考えています。後期旧石器時代という名称は矛盾しておりますが、日本列島を大きく見た場合に後期旧石器時代という名称が普遍的に使われているということで、後期旧石器時代という言葉を使わせていただいております。

それを前半期と後半期に分けております。それは、どういう分け方かと言いますと、細石刃石器群の出現をもって後期旧石器時代の後半期というふうにご言っております。細石刃石器群ではない、それ以前の石器群を前半期というふうに分けております。

これを分ける基準というのが恵庭a降下軽石で、その上下でもって前半期と後半期に分けるということをご承知しておりました。ところが、1997年と98年に行なわれました千歳市の柏台1遺跡というところから細石刃石器群が恵庭aよりも下から出るということがわかりまして、細石刃石器群の以前と以後を区分する絶対的な基準ではなくなったということがあります。ですから、前半期と後半期という分け方が果たして正しいのか、このテーマにも絡んでくるのですが、もう一度考え直さなければならぬ問題であるなというふうにご思っております。

これもまた便宜的になるのですが、そのグループを分ける意味で前半期と後半期、これは前と後ろですから、明らかに年代差を表しているわけなんです、細石刃石器群以外のものを前半期というふうにご考えますと、それらの遺跡が北海道にどういう分布を示しているかと言いますと、表3と図27をご覧ください。その箇所が28遺跡でございます。これは明らかな発掘調

査をもって出土したものを載せてあります。これ以外にも可能性のあるものはございます。この28という数字ですが、細石刃石器群は北海道にはだいたい280遺跡でございます。ですから、約10分の1の数しか発見例がないということで、この28遺跡をもって、前半期を語るというところにまた、一つの無理があるわけなんです。細石刃石器群、ちなみに図30の北海道地図をご覧ください。この丸いドットが細石刃石器群の主な分布です。これを見て分かるのとおり、北見の周辺を流れる常呂川、この周辺に細石刃石器群が爆発的に増えてくるということがお分かりになるかと思いますが、このように北海道においては、細石刃石器群が90%以上、後期旧石器時代を遺跡数から言いますと占めているという現状でございます。

その28遺跡の遺跡をもってどうということが考えられ

るかということなんです。先程の表3に理化学的な年代の測定値を掲げております。おおよそ2万4千年から1万8千年という年代値を示しております。これはもう絶対的な年代ではございませんから、おおよそ目安として、これを使用することについてはいいかと思うのですが、北海道の研究者では、あるいは北海道の歴史を概観する本では、おおよそ2万4千年から1万8千年にこういった前半期と言われている石器群が編年的に位置するだろうということをおっしゃっております。

ところが、この年代観に関しましては、本州側の研究者は本州地方との比較をしまして、いわゆる武蔵野編年、あるいは南関東の編年に合わせますと、A Tと言われる始良丹沢火山灰、これは約2万5千年前の火山灰ですが、本州の研究者はこのA Tをもって、その下は前半期、その上を後半期というような時代区分を



図27 北海道地方における後期旧石器時代前半期の遺跡位置図

番号	遺跡名	出土点数	主な年代測定値*	番号	遺跡名	出土点数	主な年代測定値*
1	奥白滝1	2,222		15	札内N	589	20,300±1,600/Ob
2	上白滝8	10,081		16	粕台1	29,213	22,550±180/14C
3	上白滝7	8,619	15,856±889/Ob	17	祝梅三角山	211	21,450±750/14C
4	岐阜第2	168		18	丸子山	212	21,940±250/14C
5	タチカルシュナイVC	355		19	ユカンボシC15	3	
6	広舞8	14,218	18,000±700/Ob	20	美々4	1	
7	鷗木	7,664	19,000±800/Ob	21	美々5	24	18,300±1,100/Ob
8	共栄3	1,539	18,400±800/Ob	22	美々8	1	
9	南町2	2,228	19,610±270/14C	23	美沢1	17	18,500±1,000/Ob
10	上似平	416	14,700±600/Ob	24	美沢3	13	
11	空港南A	54	23,850±4,480/14C	25	美沢10	15	17,000±900/Ob
12	勢雄	1,160	21,000±2,600/Ob	26	オバルベツ2	923	10,700±1,000/Ob
13	川西C	19,326	21,800±90/14C	27	神丘2・B群	1,366	
14	若葉の森(未報告)	約9,000		28	桔梗2	1,362	

\*放射性炭素年代(14C)、黒曜石水素年代(Ob)

表3 北海道地方における後期旧石器時代前半期の遺跡

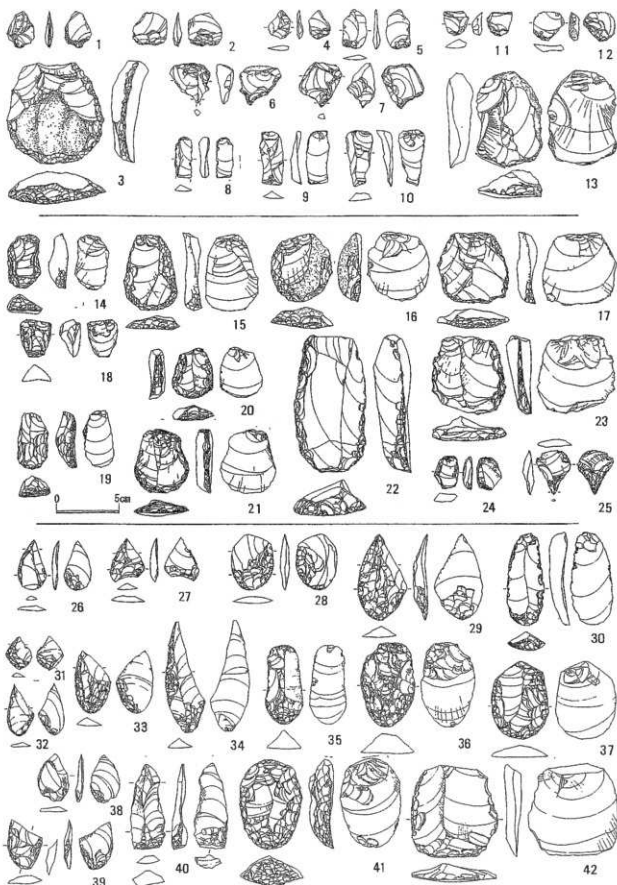


図28 後期旧石器時代前半期1群(上段)、2b群(中段)、4群(下段)の石器群

1: 祝梅三角山 2-3: 上白滝 8 4-10: 奥白滝 1 11-13: 共栄 3 14-18: 鳴木 19-25: 柏台 1  
 26-30: 上白滝 7 31-37: 広野 8 38-42: 神丘 2

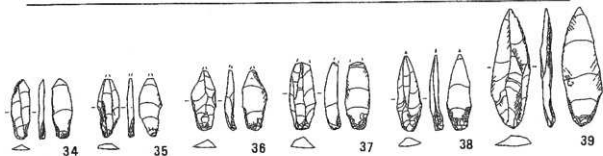
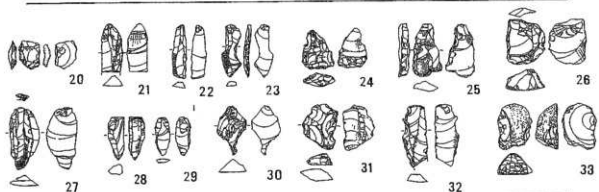
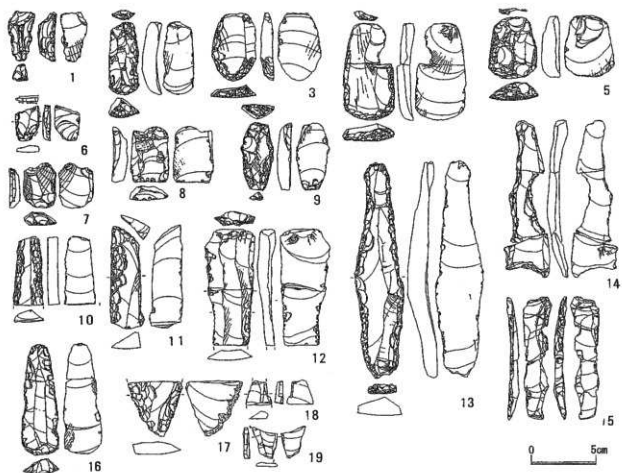


図29 後期旧石器時代前半期2a群(上段)、3群(中段)、5群(下段)の石器群

1～15: 川西C 16～19: 空港南A 20～26: 上似平下層 27～33: 勢雄I区 34～39: オハルベツ2



しています。

ところが、北海道にはこのA Tという分布は遺跡の中からはまだかつて発見されておりませんが、その基準が使えないということから、この北海道の前半期という遺跡群のほとんどをA Tの下に位置付けるといふ研究者が一部あります。

もしそういうことになりますと5千年から1万年ぐらいの開きをもってしまふという矛盾が今度生じてしまい、これは非常に大きな問題なんです、現状のところそれを打破する糸口はまだ見つかっておりません。A Tが発見されれば、また話は別でしょうが、ですから、この後期旧石器前半期という年代観については非常に不明確であるということが言えると思います。

また恵庭a火山灰の年代も確定はされていません。およそ1万7千年前だろうということ、それ以前であるということは、火山灰の状況から言えるということだけです。2万4千年という数字は根拠が理化学的なものでしかないということです。

そうしますと28遺跡はどういうグループ分けができるかということ、いろんな研究者が言っています。それを元に作成した私なりなのが図28、29です。1群というものを台形様石器、これは図28の最上段です。

1・2・4・5・11・12番、函館市の桔梗2遺跡もこのグループに入るわけですが、台形様石器という言葉でまとめられる石器群です。この特徴的なものは例えば1と2で、このように裏面の基部に平坦な加工を施す台形様石器というのは、一つの定形的な器種として捉えていいのではないかとこのように考えています。こういったものは本州地方の日本海岸沿いに富山・秋田県を中心にこういった石器群が広がっておりますので、明らかにこれは本州地方のものとなつてくるのではないかとこのように考えております。

それにつきまして、最近、上白滝8遺跡が整理作業されていまして、石刃とは言えないまでも、縦長剥片のようなものがこれに伴うのではないかとこのことが言われておりまして、上白滝8遺跡というのは非常に点数が多いわけです。1万点を超えておりますので、この資料の整理が終わった段階で、また新たなことがさらにわかってくると思われまふ。

2群としたのは、エンドスクレーパーを主体とする石器群です。私は仮に嶋木石器群と言っていますが、上土幌町の嶋木遺跡でもって、非常に多数のエンドスクレーパーが発見され、これらを2b群としています。ただこれは器種的に非常に偏つていまして、そのほか

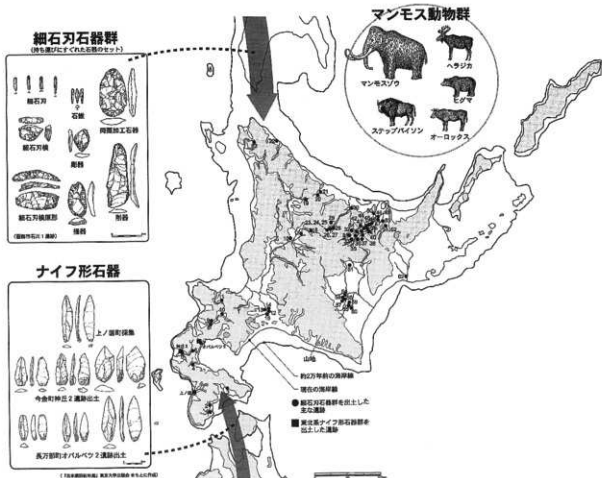


図30 北海道地方における細石刃石器群・ナイフ形石器群の分布

の石器としては25のような鎌ですとか、24の両極打法による石器とか、楔形石器というような典型的な石器が非常に少ないという特徴がございます。

4群としたのは、広鋸型ナイフ形石器を主体とした石器群です。これについては、26～29のような裏面に平坦な加工をするということは、先程申した台形様石器に通じる共通点がございました。それと35～37にあげましたようなラウンドスクレーパーは嶋木石器群に共通する石器であります。ですから、この1群、2b群、4群というのは一連の流れの中で理解できるのではないかとこのように私は考えております。その中に今金町の神丘2遺跡が位置付けられる。この図28に掲げた剥片剥離、剥片をとる技術というのは、一切石核に積極的な調整を施さない、打面を作ったらそのまま、かかとをどんだんいろいろな方向から取ってくる。あるいはそのかかとを素材にして、また剥片剥離を行うというふうな共通性がございます。石刃技法のような定形的な剥片をとらないというのが共通しております。それから石核調整がほとんどないといっている石器群です。

それに対して図29です。これは2a群として、川西Cの石刃を主体とする石器ですが、図28にありますような石器に比べてかなり石器が定形的になってきます。しかも折れてからまたさらに調整を施して使うというように非常に石器というものの形にこだわりがどんだん見えてくるという段階が川西C、それと3群とされている帯広空港の南Aと上似平下層と言われている石器群もこの石刃技法の流れの中で理解できるだろうと。そして問題なのは、この34～39の長万部町オバルベツ2遺跡の基部加工ナイフ形石器です。これは明らかに東北地方のナイフ形石器に対比される資料が北海道で初めて発掘調査で発見されたわけです。これに類似するものは上ノ国町の四十九里沢遺跡というところで表面採集されておりまして、その資料を後ろに、今日唯1点のナイフ形石器ですけれども展示しておりますのでご覧になって下さい。これは明らかに東北地方のナイフ形石器です。そういった石器群が見られる。ですから図29は石刃技法ということを基準にして図を作成したものです。

4群と5群については、恵庭aの下であるという層位的事例は一つもございません。

柏台1の細石刃石器群と不定形剥片石器群とがブロックをたがえて、ほとんど同じ層から出てきたという状況があります。剥片剥離技術の上では、同じようなところはまったくございません。あとブロックが完全に分かれているということから、この両者は時代的な差をもっているものだというふうに私は考えておりま

す。これを共伴と見る研究者もおります。これをどう評価するかというのが、一つの今後の課題であるというふうに思っています。

同じ問題はオバルベツ2遺跡にもございます。ブロック3というところから東北系のナイフ形石器が出土した。その他のブロックは蘭越技法を用いた細石刃石器群でございます。これについても層位的にどちらが下か上かというのははっきりとは分らなかったというふうに聞いております。この二つの石刃技法を比べてみたんですが、ブロック3（ナイフ形石器群）から出てくるものは上下両方に打面を作りまして、そこから石刃を順次とっていくという方法です。残核は非常に小さいものになります。ところが、蘭越技法の石刃技法というのは、ほとんど一方向から石刃が取れます。たまに下の方から石刃が取れますが、これは調整みたいな役割をもっているとして、意図的に上下から両方から取るというものではありません。そして蘭越技法では石核がどんだん小さくなっていきまして、最終的には細石刃を取るというような技法でございます。この石刃を取る技術というのは、このブロック3と蘭越技法では明らかに違うということから私はこの石器群も前後関係をもっているものだというふうに現在では考えております。

このような状況の中で、テーマにありますような年代間関係をどう考えるのかということになるのですが、結論を言わせていただきますと、現在のところ北海道で一番古い石器群は函館市の橋本2遺跡の石器、台形様石器を主体とする石器群が最も古いというふうに考えていいと思います。この実年代はいつくらいかというのは、先程も言いましたようにA.T.というのが本州では基準になっています。その下から出てきていますので、およそ2万5千年以上前というような年代を与えているのではないかとこのように考えています。その後北海道では東北地方からナイフ形石器を持った集団が、これは陸続きにはなっておりませんが、米の橋などを通りまして、北海道に渡ってきているのではないかと考えています。横山さんは船があったと言われておりますけれども、これについても検討しなければなりませんと思いますが、図に掲げておりましたように、オバルベツ2、神丘2、これは広鋸型ナイフに伴っておりまして基部加工のナイフです。それと上ノ国採集の明らかにこれは東北地方のナイフそのものと言っていいと思います。こういった遺跡はまだ3遺跡しか見つかっておりません。しかも渡島半島からの発見でございます。これが道東北地方にどういうふうな流れていっているのかというのが一つの課題でございますが、明らかに道南地方に限っているという

文化が、その次に入ってくるのではないか。それと非常に近い時期に北方から細石刃石器群、これは図30左上に持ち運びに優れた石器のセットと書いていますけれども、マンモス動物群を追いかけてこういった細石刃石器群が北方からどんどん南下してくるのではないか。その年代的な関係については詳しくはわかりませんが、一般的に考えますとナイフ形石器が古いのではないかというふうにも考えられます。先程もそう言いました。ところが、やはりこれも今後残された大きな課題だと思うのですが、やはり道南地方というのは、北からの文化と南からの文化がせめぎ合う地域であるというふうに考えています。やはり層位的にもしっかりしております千歳市周辺の発掘例というのが、スタンダードを作り上げる鍵を握っているのではないかと思います。道南では解決できない部分も多いのかなというふうに考えています。

結論としては、非常に曖昧な結論になってしまったのですが、私の話はこのようなことを考えているということです。長くなりましたが終わらせていただきます。

## 司 会

ありがとうございます。今、寺崎さんの方から後期旧石器時代の前半期、細石刃が来る前という段階になりますけれども、主にその部分でのいくつかの石器群の変遷について提示がございました。なにぶん時間がございますので、二つぐらいに絞っていきたくと思いますけれども、千葉さんの方から特に、細石刃ですね。特に蘭越と峠下とがありますけれども、そこら辺のことについてお願いいたします。

## 千 葉

蘭越については、私も20年以上前に書いたのは、上野さんと木村さんが都の出土資料について両面加工石器から作られていると、それを母材としているということで、白滝・忍路子のように新しいところになるのではないかと書くを書きました。

今回、オバルベツ、柏台でどうも1万7千、恵庭aの下、カーボンでは柏台で1万9千から2万ぐらいの数値が出ていました。今のところ古くなるだろうと。この復元資料をよく見ますと、私は木古内町の新道4をやりましたけれども、あれは美利河技法、あれは素材に対して横、この蘭越は縦というおおざっぱな概念をもっております。いずれ蘭越は古くなると自分でペーパーを書かなければならないと思っていましたけれども、ずるずる10年、20年近く経ってしまいました。

今、寺崎さんに対してのコメントですが、私自身も

この台形様石器、いわゆる立野ヶ原系石器群というのは北海道で前段の前期旧石器を除けば、後期旧石器の中でもっとも古い石器群である。最近、ナイフ形石器、昔はナイフ形石器が全然なくて、北海道は明治大学の杉原先生は石刃がもう石器なんだと、それで石刃イコール刃器という言葉でツールだと言っていましたけれども、上ノ国へ初めてお邪魔した時に、ナイフ形石器を見つけまして、松崎さんにこれはどこから拾ったんだと、どこから出たんだと、だいたひ松崎さんに記憶を蘇らせてもらった記憶がございます。その後、ナイフらしいナイフははつきり言ってありませんでした。登別の千歳5かな、そこでもナイフと言ったけれども、あれもへんちくりんなもの。それから、モザン、私の後輩が見直してナイフと言ったのも私の頭の中ではナイフではございません。それが神居2とか、オバルベツで誰が見てもナイフというのが出てきて、ほっとしています。

ただこのペーパーの中にありますし、あと佐藤宏之さんが言われている、「初期台形様石器の段階一典型的な台形様石器の段階一石刃技法と横長・幅広剥片剥離技術との二極構造の確立」という変遷は、寺崎さんとは考え方が異なるとおっしゃっていますけれども、私も佐藤さんとはちょっと考えが違います。一つには、私は長年この広部型ナイフ形石器というのは、本当にナイフなのかどうかちょっと疑問に思っています。器種としてはいいだろうと。昔、置戸安住を掘って、置戸型尖頭器とか言われた石器ですけども、ここで言っているナイフとは違うので、器種としては認めていいけれども、いわゆるナイフ形石器の系統の中でとらえるのはどうかというのが今でも疑問に思っています。

それから、オバルベツ2、柏台1の細石刃石器群と不定形石器群との関係ですが、私も今のところ時間的差異なのかなとは思っています。もし同時期だとしても集団の差異と言いますが、その辺は逆に寺崎さんお考えにはならないのでしょうか？終わります。

## 司 会

ありがとうございます。

二つ、会場からいただきました。

まず北海道埋蔵文化財センターの坂本尚史さん、広部型ナイフについて、今寺崎さんは台形様石器の流れからということで話があって、千葉さんの方から器種としてはいいが、というような感じだったのですけれども、その点いかがでしょうか？

## 坂 本

私は上白滝7遺跡を掘る機会に恵まれてまして、その

遺物を2年ほどじっくり見る機会があったのですけれども、まず印象として、神丘2の広郷型ナイフと比べますと白滝の広郷型ナイフは非常に二次加工が卓越している石器であるというふうな印象があります。千葉さんの方から、置戸安住の石器のことが出てきたのですけれども、この上白滝7遺跡では、置戸安住の置戸型尖頭器と比定されるような石器が出ておりまして、広郷と置戸安住の違いは何なのかということになりますと、平面形態が置戸安住の方が両側縁調整をして両側がシメトリーな尖頭形になる。それに対して広郷のほうは素材の側縁を残して切出形になるという違いになると思うのですが、これが上白滝7では一応共存しているというふうに考えております。

二つの石器が共存しているというふう考えたのは、ブロックの中で一緒に出てきたこと、それから縦断面形なんです、作られ方が先端部と末端部が薄く加工されて、中央部に厚みを残すというような特徴が両者共通しておりまして、また卓越した平坦剝離という、そういった二次加工の共通性もあると、両者は共存しているふうに判断いたしました。

年代観に関しては、寺崎さんの方からもありましたように、4群と5群に関してはキーになる火山灰をはさんだ層位の出土例がない。そういった時期にあやふやな石器群なんです、私もいろいろ考えた中では、寺崎さんと同じような場所に落ち着くのではないかというふうには思うのですが、とにかくこの二次加工の技術というのが前半期と呼んでいる石器の中では特異なものとして映りますので、より後半に近い、もしくはその中に入れてもいい石器の可能性もまだ残しておきたいとは思っております。以上です。

#### 司 会

ありがとうございます。もうお一方、柏台1遺跡については、不定形剥片石器群と細石刃石器群が異なるブロックから出ていることと年代観について、北海道埋蔵文化財センターの福井淳一さん、お願いいたします。

#### 福 井

前に北海道考古学会の時にもこの話がちょっと問題になったと思うのですけれども、調査中、未熟な部分もあって、ちょっと誤解を受けるような言動をしたかも知れませんが、最終的に私はこの二つは時期差だというふうに考えております。

千歳は恵庭aが厚く堆積しているので、そこまでははっきりわかるのですけれども、恵庭の下になりますと、柏台1遺跡ではまだ比較的層がはっきりしているのですけれども、1番上に羊蹄の第1と思われる火山

灰がありまして、その下に第2と思われる火山灰がありまして、その下からまず蘭越の細石刃石器群が出てきて、そのもうちょっと下から不定形剥片石器群とした石器が出てきます。その下になるともうしばらく火山灰が出てこないで、もし先程、寺崎さんが言われたようなナイフ形石器が千歳の辺りで見つかったら、もう少し細かい層の観察をしないと上下関係は意外と分かりにくいのではないかと思います。あの中でも当然、インポリーション等がありますので、炉址ですとか、そういったところで細かく見ないとなかなか検討しづらい部分があるのでないかなというふうには私に考えています。以上です。

#### 司 会

ありがとうございます。

以上、主に北海道における後期旧石器時代前半期の石器群について、その変遷をたどって試みてきたわけなのですが、登壇者の方から何か一言ございましたらどうぞ。

#### 千 葉

今、図30を見ながら、先程寺崎さんのせめぎ合いと言いますか、しのぎあいと言いますか、そういう話を聞いて気付いたのですが、たった今気付いたばかりです。柏台はいわゆる石狩低地帯、オハルベツは黒松内低地帯と言いますか、そういったところを地形にしていることからすると、なかなか有り得るのかなということは今、気付きました。簡単ですが。

#### 司 会

時間がございませんので、横山さんの方からまとめていただければ。

#### 横 山

今日は、北海道の旧石器の話でも非常に重要なテーマでした。特に渡島半島では、前期旧石器、私が提言したものが今後も皆さん方で大いに議論して具体的な形で石器を見つけていただきたいというふうにも私も努力したいと思っています。

先程、千葉英一さんからちょっと耳打ちされて、資料集に宮本さんが掲げていた花岡の資料を急いで見たのです。特に1番は宮本さん、もしかしたらいいかも知れない。それから寺崎さんの発表については、私が提言した前期旧石器以外、誰もが認定できる古い石器群というのは、この渡島半島では樫原2遺跡に代表されるということ。実を言うとこれに関連する祝梅三角山遺跡は、私が若い頃、吉崎昌一先生を調査主任とし

て石狩市の石橋孝夫君などとも一緒に調査した記念すべき遺跡です。それが当時、北海道最古だろうというふうには私達は主張したのですが、なおかつ現状に至ってもこのグループが最も古い位置を維持しているというのは、なんだか照れくさいようなそういう感じをもっているように感じました。

特に石狩低地帯はご承知のとおり、これは北と南と両方の人の動きがある地域であります。特に祝梅三角山を掘った時は、黒曜石の分析の走りでありまして、赤井川産と白滝産の二つの原石が入っていたということで、当然これは北のグループ、南のグループの動きがかなり頻繁にあったらというふうを考えていて、当時書いております。そういうことがさらにこの北海道の中で古い段階でも行われていたわけです。当時私達は、これは切出しナイフなどという過激な言い方をした時期があります。それはどうやら柔らかく否定されているようですが、基本的には切出しナイフと同じグループに結び付くというふうなことであります。

今後、この特に古い人の動きをめぐって、縄文も大いに結構ですし、統縄文も大いに結構です。各時代面白いテーマを見つけて、その一つにこの最古の人の話があるだろうと思っています。

今日は、私のおかしな話を熱心に聴いていただき、どうもありがとうございました。

## 司 会

ありがとうございました。これで第Ⅱ部研究テーマ「南北海道にはじめてヒトがきたのはいつか」を終わらせていただきます。登壇者の方々どうもありがとうございました。(拍手)

## 引用文献一覧

- 小笠原忠久1985『白尻B遺跡vol. V 縄文時代中期集落跡の発掘調査報告書』南茅部町教育委員会
- 鈴木正昭1991『釜谷4遺跡―渡島地区広域営農団地農道整備事業に伴う発掘調査報告書―』木古内町教育委員会
- 芹沢長介1969「日本の石器時代」『科学』39-1  
北海道埋蔵文化財センター編2000『長万町花岡2遺跡・花岡3遺跡』
- 横山英介1979「北海道における前期旧石器の可能性」『考古学ジャーナル』No. 167
- 横山英介1984「北海道における前期旧石器存否論」『北海道の研究 第1巻 考古編1』清文堂出版
- 横山英介・高橋 理1995「オオツノシカ化石角の切痕―北海道における最古のヒトの遺産―」『季刊考古学』52
- 吉崎昌一 1971「人工の可能性ある破砕礫」『ナウマン象化石発掘調査報告書』北海道開拓記念館



## 【活動報告1】

# 第24回 南北海道考古学情報交換会概要

24回目となる今年大会では、事前に81名の申込みがあり、2日間で延べ180名の参加があった。

### ◎内 容

#### ＜第1部 情報交換1＞

今年度、渡島檜山地域で実施された発掘調査のうち、市町村・大学による調査のライド発表である。今年度は檜山地域で3町4遺跡、渡島地域では、8市町の13遺跡（地点）と例年増して調査件数が多かった。中でも新聞報道で話題の森町鷲ノ木5遺跡の発表に注目が集まった。

#### ■今金町 美利河1遺跡K地点

國學院大学による学術調査。平成8年よりはじまるK地点の調査は8次を数え、今回の調査によりK地点の完掘を果たした。調査面積104㎡、1次からの出土石器の総点数は34,972点となった。特徴的な石器としては大形石刃および広葉型細石刃がある。今後、接合作業による石器製作技術の復元、A地点出土資料との比較研究が必要とされる。（岩崎厚志）

#### ■上ノ国町 夷王山墳墓群

史跡隣接地の勝山館跡ガイダンス施設建設に伴う上ノ国町教育委員会の調査。史跡後方の夷王山南東斜面に所在する約650基の中世墓群である。第Ⅱ地区において、他地区では見られない十字形の火葬墓が確認された。（塚田直哉）

#### ■上ノ国町 ワシリ遺跡

町内遺跡発掘調査等事業による上ノ国町教育委員会の保存目的確認調査。従来ワシリチャシ跡とされてきた遺跡が昨年度の調査で弥生期の遺跡であることが確認されたため改称した。薬研堀の空壕1か所、竪穴住居跡15軒、土坑約50基などが確認された。遺物は、内耳土器を含む縄文土器約3,000点の他、土玉・スラグ・羽口・石鉄・砥石などが出土した。（斉藤邦典）

#### ■奥尻町 青苗遺跡（貝塚台地北東斜面）

奥尻空港整備事業に伴う奥尻町教育委員会の調査。縄文時代早期末の集石遺構1か所と石器集中1か所が確認された。遺物は、土器150点、石器等398点が出土した。（木村哲朗）

#### ■松前町 東山遺跡（朝日豊岡線）

町道改良工事に伴う松前町教育委員会の調査。平成13年度からの継続調査。幕末から明治期にかけて

の土坑23基、焼土1か所、溝状遺構17か所、根固め石8基が確認された。他に縄文時代に属する土坑3基、焼土2か所、Tピット2基が確認された。遺物は、幕末から明治期にかけての陶磁器類19,041点と、縄文早期から前期に属する土器667点、石器255点が出土した。（天方博章）

#### ■松前町 東山遺跡（急傾斜地）

町道改良工事に伴う松前町教育委員会の調査。縄文時代に属する住居跡2軒と土坑23基が確認された。出土した土器は縄文時代前期後半から晩期までで、中期末から後期が主体となる。（前田正憲）

#### ■史跡松前氏城跡 福山城跡

史跡整備事業に伴う松前町教育委員会の調査。城郭正面門である沖ノ口門と馬出門および天神坂、三の丸の石垣調査を実施した。沖ノ口門では、隅石が確認された。また天神坂の脇に倒溝が確認された。三の丸石垣調査では、石垣裏込めの中にさらに古い石垣が確認された。これまで発見例のない笏谷石の布積みである。遺物としてはコンブラ瓶の底部が出土した。（前田正憲）

#### ■松前町 松城遺跡

町道工事による松前町教育委員会の調査。縄文後期に属する住居跡1軒、土坑2基の他、江戸時代中期の粘土探掘跡2か所が確認された。探掘跡はその後ゴミ捨て穴として利用されていたため、大量の陶磁器類が炭化物と共に出土した。（前田正憲）

#### ■福島町 豊浜遺跡

急傾斜地治山工事に伴う福島町教育委員会の調査。縄文後期後葉に属する竪穴住居跡3軒と檜文期の竪穴住居跡1軒が確認された。また、縄文前期の捨場（物送り）も確認された。（小柳リラコ）

#### ■上磯町 押上1遺跡

高規格道路函館江差自動車道建設工事に伴う上磯町教育委員会の調査。昨年度からの継続である。遺構は竪穴住居跡6軒、プラスチックピット7基、Tピット1基が確認された。遺物は土器片約12,600点、石器類1,100点で、縄文中期末から後期初頭に属するものである。（安西雅希）

#### ■大野町 向野G遺跡

町史編さん事業に係る大野町教育委員会による遺跡確認調査。縄文後期に属する土坑1基、焼土遺構1か所が確認された。遺物は土器約400点、石器約20点が出土した。（布施和洋）

#### ■南茅部町 垣ノ島A遺跡

道補助事業の遺跡確認調査で南茅部町埋蔵文化財調査団が実施した。「コの字状」盛土遺構をもつ縄文時代後期初頭の集落跡が確認された。盛土の規模は長軸約120m、短軸約96mで、開口部は北西を向いている。盛土の幅は約30m、高さは約2mとなっている。また、周辺からは縄文中期に属する竪穴住居跡も確認された。(野月寿彦)

#### ■森町 森川2遺跡

北海道縦貫自動車道建設工事に伴う森町教育委員会の調査。前年度検出された「土石流堆積物」下から縄文晩期に属する遺物包含層が確認された。包含層が「土石流堆積物」によって保護され、遺跡および旧河川の古環境が保存されていた。また、縄文晩期の石垣が1基を確認した。(佐藤 稔)

#### ■森町 鷺ノ木7遺跡

北海道縦貫自動車道建設工事に伴う森町教育委員会の調査。新発見の遺跡である。縄文時代中期を主体とした遺跡で、土坑4基、小ピット1基、焼土2か所などの遺構が確認された。次年度以降に継続調査を予定している。(佐藤 稔)

#### ■森町 鷺ノ木5遺跡

北海道縦貫自動車道建設工事に伴う森町教育委員会の調査。縄文後期に属する環状列石1基と竪穴墓1基などが確認された。環状列石は中央帯・内帯・外帯の3重に礎を円環した配列で、外帯の外周は37m×34mを測る。石列は約500個の礎によって構築されていた。土層観察から、環状列石構築の際に中心部に向かって浅い皿状に削平（造成）する土木工事が成されていた。また、竪穴墓は環状列石の南側5mほどの場所で検出され、内部に土壌墓が10基検出された。道内最大級の環状列石の発見として報道などでも大きくとり上げられた。(荻野幸男)

#### ■森町 鷺ノ木4遺跡

北海道縦貫自動車道建設工事に伴う森町教育委員会の調査。舌状台地の斜面部から、縄文後期前葉に属する大形の土坑が24基検出された。また、台地上位のテラス部からは配石墓2基と土坑1基が確認された。前年度調査で舌状台地を取り囲むように検出された石垣状配石遺構と共に、興味深い発見である。(八重柏 誠)

#### ■八雲町 オクツナイ2遺跡

浜松小学校改築工事に伴う八雲町教育委員会の調査。縄文時代に属する遺構・遺物が確認された。遺構は、土坑8基、焼土5か所、柱穴118か所、溝1か所が検出された。遺物は、北大直式もしくは十勝茂寄式に相当すると思われる棒文土器約1,429点、石器

類520点、古銭（寛永通寶）1点が出土した。

(三浦孝一)

#### ■函館市 権現台場遺跡

市道舗装工事に伴う函館市教育委員会の調査。縄文中期および幕末の遺構・遺物が発見された。遺構は、竪穴住居跡17軒、ピット22基、Tピット2基、幕末遺構1か所が確認された。遺物は縄文中期の円筒上層式・サイベ沢式・榎林式期の土器や石器など、また幕末期の瓦片・古銭・銃弾など約20,000点が出土した。(野村祐一)

#### <第II部 情報交換2>

研究テーマ「南北朝道にはじめてヒトがきたのはいつか」と題し、南北朝道地域における最古の旧石器をめぐり、意見発表が行われた。提言者の横山氏から2遺跡が提起され、それに対して宮本、竹花氏から否定的なコメントが加えられた。これをうけて寺崎氏から、本州東北地方の影響による函館市権現2遺跡が南北朝道で最古の石器群として提言された。詳しい内容について、本号2～21頁に収録した。

#### <第III部 情報交換3>

平成15年度に北海道埋蔵文化財センターが実施した渡島庁管内における発掘調査のスライド報告と、2研究機関による自然科学的分析の報告がなされた。

#### ■恵山町 恵山貝塚

重要遺跡確認調査による道埋蔵文化財センターの調査。縄文時代の貝塚遺跡で、当該期の竪穴住居跡7軒、墓4基、土坑2基、焼土3か所、埋設土器1か所のほか、縄文期のTピット3基、焼土2か所が確認された。(西脇対名夫)

#### ■上磯町 館野遺跡

高規格道路函館江差自動車道建設工事に伴う調査。縄文時代の竪穴住居跡40軒、土坑49基、Tピット7基、溝状遺構1か所、焼土56か所、屋外炉10基、石組み13か所の他、中世もしくは幕末期に属すると思われる土塁に関連する遺構や断層などが確認された。(中山昭大)

#### ■森町 石倉2遺跡

北海道縦貫自動車道建設工事に伴う調査。縄文時代中期および晩期に属する竪穴住居跡11軒、土坑9基、Tピット10基、焼土2か所が検出された。遺物は、土器等12,246点、石器等4,312点が出土した。住居跡のうち9軒は細長い段丘の尾根上に並んで発見された。(阿部明義)

#### ■森町 上台1遺跡

北海道縦貫自動車道建設工事に伴う調査。縄文時

代に属する住居跡1軒、ピット62基、Tピット5基、配石遺構3か所、石囲い炉14か所などが確認された。  
(阿部明義)

#### ■森町 森川4遺跡

北海道縦貫自動車道建設工事に伴う調査。縄文時代前期から晩期にかけての遺跡で、大型プラスチック状ピットを含む土坑8基の他、柱穴状小ピット2基、石組炉2か所、焼土5か所が確認された。遺物は、土器等21,323点、石器等2,741点が出土した。  
(阿部明義)

#### ■森町 石倉3遺跡

北海道縦貫自動車道建設工事に伴う調査。縄文時代後期初頭の配石を伴う土坑1基と、Tピット1基が確認された。遺物は、余市式土器をはじめ、土器・石器類約19,500点が出土した。(大泰司 統)

#### ■森町 三次郎川右岸遺跡

北海道縦貫自動車道建設工事に伴う調査。縄文時代中期から後期を主体とする集落跡で、竪穴住居跡12軒、配石遺構1か所、土坑60基、焼土15か所が確認された。住居跡では、埋壘をもつものや掘り込みの浅いものなどが検出された。焼土は統縄文時代に属するものが多く、焼骨片が多量に観察された。  
(大泰司 統)

#### ■森町 三次郎川左岸遺跡

北海道縦貫自動車道建設工事に伴う調査。縄文時代中期から後期を主体とする遺跡で、土坑1基および焼土1か所が確認された。(大泰司 統)

#### ■森町 上台2遺跡

北海道縦貫自動車道建設工事に伴う調査。中近世

の煙跡の他、統縄文から近世の間とみられる焼土66か所、縄文期の土坑2基、Tピット4基が確認された。煙跡は明瞭な竪立ての痕跡がなく、地形の傾斜方向に沿って溝状に耕したものとみられる。構築年代は、K-oより下層でB-Tmを掘り込んでいることから10世紀後半から西暦1640年までの間と考えられる。また、耕作溝で部分的に耕作痕が確認された。  
(大泰司 統)

#### ■「加速器質量分析法による歴史時代資料の<sup>14</sup>C年代測定」(名古屋大学年代測定総合研究センター)

加速器質量分析法(AMS)による<sup>14</sup>C年代測定法についての発表。AMS法による試料は数ミリグラムで足り、また、測定誤差も20~40年にまで抑えられている。年代が判明している歴史時代資料の測定により、その有効性と課題が提示された。  
(小田寛貴)

#### ■「X線マイクロアナライザーによる考古学遺物の分析」(函館工業高等専門学校)

X線マイクロアナライザー装置を使用した、縄文土器の分析についての発表。土器胎土に含まれる砂粒の成分組成情報が得られる。遺跡別の土器胎土砂粒の成分組成を比較することにより、土器の製作年代や製作技法、さらには地域間交流などを解明する有効な手段になると考えられる。(上野晃平)

#### <施設見学>

情報交換終了後、ピリカ旧石器文化館へと移動し、館の展示および史跡整備の内容について、今金町教育委員会学芸員の解説により見学した。

## 【活動報告2】

# 2003~2007年度 南北海道考古学情報交換会の動向

### 2003(平成15)年度

- ・第24回情報交換会 12月6・7日 今金町  
研究テーマ 北海道にはじめてヒトがきたのはいつか
- ・遺跡見学会 9月20日 上磯町  
館野遺跡(財団法人北海道埋蔵文化財センター)

### 2004(平成16)年度

- ・第25回情報交換会 12月4・5日 知内町  
研究テーマ 渡島半島における環状列石  
~鷺ノ木5遺跡を中心に~
- ・遺跡見学会 5月22日 森町  
鷺ノ木5遺跡(森町教育委員会)

### 2005(平成17)年度

- ・第26回情報交換会 12月3・4日 厚沢部町

- 研究テーマ 幕末の城郭  
~館城を中心に~

### 2006(平成18)年度

- ・第27回情報交換会 12月2・3日 松前町  
研究テーマ 発掘調査の成果をどう活かすか  
~史跡整備から~
- ・遺跡見学会 8月5日 函館市  
白尻C遺跡(NPO法人函館市埋蔵文化財事業団)

### 2007(平成19)年度

- ・第28回情報交換会 12月1・2日 函館市  
研究テーマ 中空土偶の国宝指定とその意義
- ・遺跡見学会 10月6日 函館市・北斗市  
桔梗2遺跡(NPO法人函館市埋蔵文化財事業団)  
館野2遺跡(財団法人北海道埋蔵文化財センター)